

学生相談における居場所づくり (2) －ランチアワーの取り組み－

Creating Whereabouts for Student Counseling (2) －Efforts of Lunch Hours－

別所 崇
BESSHO Takashi

キーワード：学生相談，居場所，ランチアワー，ボランティア，コミュニケーション
Key Words：Student Counseling，Whereabouts，Lunch Hours，Volunteer，Communication

1. はじめに

筆者は、前稿¹⁾において、本学の学生相談における居場所づくりについて、対人関係支援の観点から論述した。そこでは、居場所づくり・人間関係づくりの取り組みとして、「ほっとスペース」の展開と「手作りうちわづくりイベント」について報告した。「ほっとスペース」は、昼休みや授業のない時間に、空き教室や校舎の外階段、校舎裏といった場所で、食事を摂ったり読書をしたり、ボーっとしたりする時間を過ごしている学生に、安心して過ごせる室内環境を提供することを目的として設置した。場所としては、図書館内の多目的スペースと校内の和室を利用した。「手作りうちわづくりイベント」は、本学学生相談室カウンセラーの、モノ作り系の簡単な一人作業の方が、参加者のモチベーションも高まり、ほっとスペースの広報にもなる、という意見を参考に実施した。

本稿では、その続編として2017年度後期に本学において、「ほっとスペース」の一環として実施した、ランチアワーの取り組みについて報告したい。

2. 学生相談におけるランチアワーの取り組み

近年、学生相談の分野において、個別カウンセリング以外の多様な活動が行なわれている。岩橋²⁾によると、それらの多くはグループアプローチの形態を取り、「居場所的空間の運営、対象限定の治療的グループ、体験型成長促進グループ、イベント形式出会いサポートグループ、心理教育的グループ（授業を含む）」²⁾の5層のプログラムに分類できるとしている。また、学生相談ハンドブック³⁾にも、「学生相談機関はすべての学生の心理・社会的発達支援を目的としており、心の健康の問題の予防的役割も担っているゆえに、全学生に向けての教育・予防活動は欠かせない。」³⁾として、そのあり方として学生全体への取り組み、グループを対象とした取り組み、ピアサポートへの取り組みの3つを挙げている。その中で、グループ対象の取り組みとして、①エンカウンター・グループ、②心理教育プログラム、③体験・教室、④談話室の運営の4つを挙げている。

ランチアワー（ティーアワー、昼休みアワー、等の名称もある。以下、ランチアワー等と表記。）も、これら個別カウンセリング以外の活動の1つで、2006年独立行政法人日本学生支援機構の「大学等における学生生活支援の実態調査」参考資料⁴⁾として掲載されている<学生相談に関する特色ある取り組み、強化・充実している取り組み、工夫点など>に、昼食会やランチタイム開放、ティーアワーといった取り組みを挙げた大学・短期大学が25校あった。例えば、神戸女学院大学では、2000年からウィークリーグループを開始し、カウンセラーと一緒にお茶を飲みながら話したり、性格テスト・職業興味検査などを受けてもらえる「ティーアワー」、クッキー・ケーキ・チョコレートやランチを一緒に作って食べる「ランチセッション」、自己分析のためのプログラムなどを行う「自分を知るためのプログラム」などの企画を実施していた⁴⁾。2018年現在でも神戸女学院大学⁵⁾では、グループプログラムとして、「ティーアワー」が開催されており、それ以外にもグループプログラムとして、「マ

ンスリープログラム」や「サポートプログラム」も実施されている。ランチアワー等の取り組みの現状を知るため、試みにインターネットの検索エンジン (Google) で、「学生相談 ランチアワー」と入力すると、1 ページ目に以下の大学の取り組みが表示された (表 1)。

表 1 Google 検索によるランチアワー実施大学一覧 (検索結果 1 ページ目のみを記載)

大学名	名称	主催	実施内容 (各大学 HP より)
帝塚山大学	ランチアワー	学生相談室	昼休みに相談室を定期的に開室しています。おしゃべりや休憩に利用してください。弁当持参も OK です。 ⁶⁾
関西福祉科学大学	ランチアワー	学生相談室	お昼休みの 12:10~12:55 まで、学生相談室を開放しています。特別な相談がなくても、自由にお越し下さい。日時などの詳細は学生相談室からの掲示をご覧ください。 ⁷⁾
明治大学	ランチアワー	学生相談室	このたび、明治大学学生相談室では、学生相談室を身近に感じてもらうため、ランチアワー～ランチ持参で来ませんか?～を開催することとなりました。「学生相談室ってどんなところ?」「教員相談員とお話したい!」「ランチ友達つくりたい」など、動機は様々で結構です。みんなで気軽にランチしましょう♪ ⁸⁾
京都外国語大学	ランチアワー	学生相談室	履修登録も始まり、いよいよ本格的に授業が始まりましたね。少し新しい生活リズムにも慣れつつあるところでしょうか。さて、学生相談室では今年度より毎週金曜日のお昼休みにランチアワーを開催することになりました。新しい友達や知り合いが欲しいなという人も、ひとりでごはんを食べるのは嫌だなという人も、一緒にランチを食べたり、おしゃべりしたりしませんか。また、ちょっと一息つきたい、ひとりでランチをゆっくり食べる場所が欲しいという人も大歓迎です。 ⁹⁾
麗澤大学	ランチアワー・イベント	学生相談センター	お昼ごはんを食べながら、学生やカウンセラーと交流する会です。授業期間中の毎週 1~2 日のお昼休みに開催しています。季節のイベントも開催します。気軽に遊びに来てください。 ¹⁰⁾
広島修道大学	ランチアワー	学生相談室	昼休みの時間 (12:00-13:00) に相談室の分室を開放します。カウンセラーや相談員の先生とお喋りしたい方も気軽にのぞいてみてください。 ¹¹⁾
目白大学	ランチタイム	学生相談室	学生相談室では、今年もランチタイムを開催します。本学の大学生・短大生ならどなたでもご利用できます。「他学科の人と知り合いたい」「趣味の合う人を見つけたい」「ひとりで食べるのはつまらない」と思ってる人は、一緒にお昼ごはんを食べませんか? ※お茶をご用意していますので、昼食を持参してお越しください。 ¹²⁾

※検索日時：2018年10月27日15時47分

上記の7大学の取り組みをみると、ランチアワー等の実施形態としては、昼休みに相談室を開放するというところが共通項目で、大学によってはカウンセラーや(教員)相談員、学生との交流やおしゃべりもできることや、季節のイベントの開催を追加しているところもあることがわかる。また、先述した神戸女学院大学の取り組みでは、ティーアワーの時間に性格テストや職業興味テスト、ビーズやはた織り体験の実施ができること告知している⁵⁾。

こういったランチアワー等の実践報告として、中村の報告がある。中村は長年学生相談活動の一環として「ティーアワー」の実践に取り組んでおり、「「ティーアワー」とはお茶を飲

みながら行うグループカウンセリング(集団療法)で、集団の中で自己理解や仲間関係を促進する「対人関係の改善と人間的成長」を目的としたグループ・アプローチである¹³⁾と定義している。その上で、「「ティーアワー」は、その仲間関係の親密さを育て、仲間からの忠誠心を得ることによって、自己を確立していく発達のプロセスを体験できる¹⁴⁾場所と述べている。また、中村は別稿¹⁵⁾において、「ティーアワー」の意義として、安全な居場所と複数の他者との関係を作ること、の2点を挙げている。前者については、学生相談室を家と大学の間にある中間的な安心できる場所として、カウンセラーを常にいる見守り人として捉え、「理解ある大人(カウンセラー)の基で自分のペースでゆっくりと現実を体験させ、それを通して自己の確立を図ることが必要¹⁶⁾であると指摘している。後者については、青年期の仲間同士の触れ合いを通して、「自分の安定性を維持しながら、他者を主体的に選択し、適度にバウンダリーを開閉しながら、さまざまな対人関係を利用し、自分の成長に必要なタイプの関係を選び取っていく¹⁶⁾ことが必要と指摘している。中村が「ティーアワー」の意義として挙げた2つの指摘から、本稿で報告する取り組みについて、重要な示唆を得ることができた。

3. 本学におけるランチアワーの取り組み(2017年度)

3-1 取り組みの概要

前稿¹⁾で報告したように、本学では2017年度前期より、学内での学生の居場所づくりの取り組みとして、「ほっとスペース」と名づけた場所を、最初図書館内の多目的スペースに、次いで校内の和室に設置した。前期は、一人でほっとできる場所の提供を重視し、掲示には守ってほしいこととして、“一人でほっとできるスペースにしたいと考えていますので、静かな環境を乱すことになった場合は、利用をお断りする場合があります”と注記をしていた。しかし、『うるさくしないので、友だち同士で利用してもいいか?』や『入りたくて覗いてみたけど、人がいなくて入りにくかった。』というような声が学生から出たため、「ほっとスペース」の新たな展開を図ることとした。

2017年度後期からは、友だち同士でも利用でき、来室した際には気軽に話し相手となれ、簡単な相談にも乗れる人材(見守り人)を配置した「ランチアワー」を、居場所づくりの取り組みの一環として実施することとした。気軽に話し相手となれる人材については、ボランティアを活用して、学外の人材を導入することとした。その理由としては、学生にとって年の近い人物の見守りが、居場所を求める学生の支援に有用ではないかと考えたからである。学生にとって年の近い人物ということについては、枝廣¹⁷⁾の「ナナメの関係」という考え方がある。枝廣は「中学生と高校生、中学生や高校生と大学生の間に上下関係のない「異年齢間の中立的関係」がある」と指摘し、「近い年齢差においてもタテとヨコの“間”の「斜めの関係」は存在しうるものと考えられる。」¹⁷⁾と述べている。その上で笠原の「斜めの関係」^{注1)}と区別して「ナナメの関係」の用語を使用している。このような“斜め(ナナメ)の関係”については、文部科学省の「「いじめを早期に発見し、適切に対応できる体制づくり」—ぬくもりのある学校・地域社会を目指して—子どもを守り育てる体制づくりのための有識者会議まとめ(第1次)」¹⁸⁾や首相官邸が組織する教育再生実行会議専門調査会¹⁹⁾でも取り上げられている。前者では、「親でもない教師でもない第三者と子どもとの新しい関係」を「ナナメの関係」と定義し、後者では、そのメンバーである認定NPO法人カタリバ代表理事の今村が、「親近感はあるけれど少し距離があるちょっと年上の先輩」と中高校生との関係を「ナナメの関係」と呼んでいる²⁰⁾。今回のランチアワーの実施に際しては、枝廣や今村の指摘する関係性を基盤としたボランティアの活用を志向した。ボランティアの募集については、学生からの相談が学校生活への不適應や心理的症状に類するものであった場合、その場である程度対処でき、守秘義務の考え方も理解できており、筆者とも連携して対応ができるという条件を考え、臨床心理学を専攻している大学院生の活用を構想した。そこで、ボランティアとして来てもらえる範囲内にあるA大学大学院とB大学大学院の2校に筆者の知人(臨床心理学が専門の教員)が在職していることから、ボランティアの派遣が可

能かの問い合わせを、知人の教員あてに行った。すると A 大学大学院の教員から、派遣が可能との返事があったため、筆者が直接 A 大学を訪問し、臨床心理学専攻の大学院生に対して事業の目的・背景・活動内容についての説明をし、参加協力をお願いした。その結果、最終的に7名の応募があった。

3-2 ランチアワーの展開

「ランチアワー」は、2017年12月8日（金）を初回とし、2018年1月26日（金）まで、月に2回金曜日に計4回実施した（表2）。場所は、本学6号館2階の和室とし、キャンパス内の数か所にポスター掲示を行うとともに、和室前の廊下に立て看板を設置した。ボランティアについては、それぞれと活動可能な日時の調整を行い、下記のように和室内の環境が多数を収容できる広さではないため、多くて1回につき2人とした。和室内の環境については、定員として10人程度を想定していたため、高さ30cmの長机を2つ合わせた形にして、周りに座布団を4枚配置した空間を3か所設定した。また、十字型にパーティションを並べ、それぞれを独立した縄張りのように区切った。見守り人のスペースについては、受付を兼ねるため、高さ30cmの長机1台の前に約1mの低いパーティションを置き、和室の靴脱ぎスペースの横に設えた（図1）。

表2 「ランチアワー」実施結果

実施日時	利用者数（括弧内はグループ構成）	利用に至る経路	見守り人
2017年12月8日（金） 12:20-13:00	8人 (4人+ <u>2人</u> +2人)	4人:教員からの紹介 4人:直接来室	筆者 教員 M ボランティア Cさん ボランティア Dさん
2017年12月15日（金） 12:20-13:00	3人 (<u>2人</u> + <u>1人</u>)	2人:直接来室 1人:教員からの紹介	筆者 教員 M ボランティア Eさん ボランティア Fさん
2018年1月19日（金） 12:20-13:00	<u>1人</u>	直接来室	筆者 ボランティア Gさん
2018年1月26日（金） 12:20-13:00	0人		筆者 教員 M ボランティア Gさん

※表中下線部の学生は同一の組み合わせである。

※「ランチアワー」実施期間中の午後の時間帯に「ほっとスペース」の開室もあった。上記ボランティアのうちCさん、Eさんとあと2名のボランティアが、そちらでも活動した。

※教員 Mは、「ランチアワー」の実施にあたっての学内の協力者である。

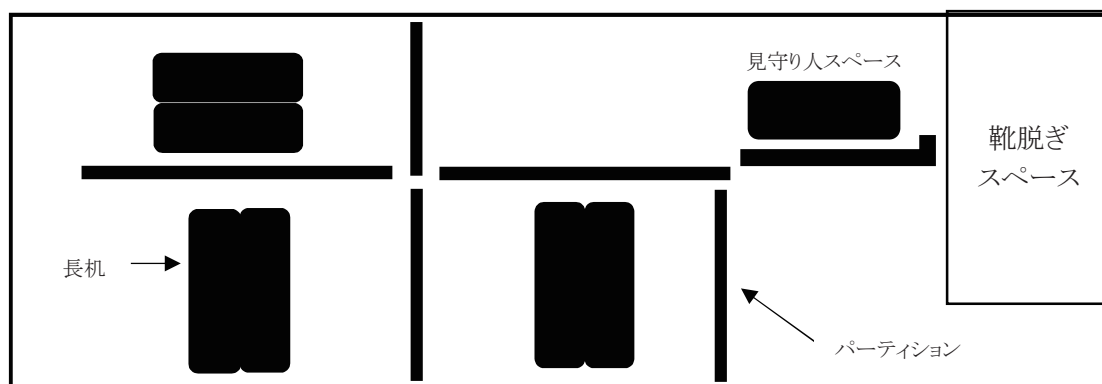


図1 和室の設え

表2の通り、「ランチアワー」の利用者は述べ12名であった。12月の2回に関しては、

初めての試みでもあり、目新しさに利用した学生や、筆者をはじめとした教員からの紹介された学生もあり、8名と3名の利用があった。しかし、1月になると前回の利用者の再利用があったのみで、1月26日は利用者がなかった。この日に関しては、定期試験期間に入っていたため、試験の準備や時間割の関係で利用者がなかったものと思われる。

3-3 ボランティアの活動内容

表2の通り、「ランチアワー」には5名のボランティアが参加した。その中には、在籍している大学院の臨床活動の一環として、学校現場での居場所づくりに参加していた院生もあり、一人ひとりと話をする中で、今回の「ランチアワー」や「ほっとスペース」の展開について、今後の参考になる意見を得ることができた。

表3は参加したボランティアの活動日誌に記載されたコメントの抜粋である。なお、ここに挙げたC～Gのボランティアからは、本稿への自らのコメントの掲載について、所属するA大学大学院の教員を通じて、許可を得ることができている。

表3 ボランティア活動日誌に記載されたコメント

ボランティア	コメント
Cさん	今回は学生が多くにぎやかだったが、最初に来た学生は「見られてる」と気にしていることがあるようだったので、見守り際のスタッフの座る場所も状況に応じて変えた方がよいのかもしれないと思った。
Dさん	昼食をとる場所として機能しており、音楽もかかったり（筆者注：一人の学生がスマートフォンで音楽をかけていた）と賑やかな雰囲気だった。今日のような雰囲気であれば、パーティションが無いほうが自然と過ごせると感じた。ただ、1人の利用者が居る場合は落ち着いて過ごすのは難しいのではないかと思う。今後どのような生徒が多く利用するか、によるが、団体での利用者、個人での利用者どちらも一定数いるならば、他の部屋を開放するとそれぞれが過ごしやすくなると感じた。
Eさん	自分たちから話しかけに行ってもよいか悩み、2人の女の子グループに話すことができませんでした。話をきいてもらえることに対するニーズが本人たちにあるのかどうか、見極めつつ、もっと積極的に動いても良いような気がしました。もう一人の方は、先生と一緒に来て、きょうだいのことや授業のことなど様々に話してくれました。初めて来たようでしたが、リラックスして、楽しんでくれていたようなので、何回か来られるようであれば、関係がどう深まっていくか、どんな話が出るかも見守っていこうと考えています。
Fさん	靴を置いていたので、最初の学生さんが入ろうと思って来たけど、靴があるのを見て帰ってしまいました。一番でいたい（最初がいい）学生さんもいるようなので、靴は靴箱へ入れて、見えないようにしてあげた方がよかったですと思いました。一人で来た学生さんに、話しかけていいのか、一人で過ごしたいのか分からず様子を見守っていましたが、先生と、皆で過ごす事で、良かったと思いました。13時が終わる頃、皆さん名残おしそだったので、皆さんリラックスされていたのかなと感じました。和室は横になる事もできるので良いのかもしれないですね。
Gさん	今日は利用が一人であったため、静かだった。人によるかもしれないがそうした静かな感じが苦手な方もいると思うので、適度な音量のBGMなどがかかっているとよいのではないかと考えた。一人で静かに過ごしたい方はよいかもしれないが、スタッフと話をすることも考えている方にとっては、見守り手がコロコロと変わるのはしんどいかもしれない。今日の方も、「前は違う方がいた」と話しており、私と2人の間、少しだけ困った様子のときがあった。可能なら、継続して同じスタッフがいるようにできるとよいと思った。また、私自身初回だったため、どういった形で関わっていこうかがあいまいだった部分もあった。学生に近い年齢というところから、より学生側に近い存在としてフランクに関わっていくのか、どうするのがよいか、模索したい。<1/19 記載分>大学の先生のお話を聞くことで、どういったことが問題としてあがっているのか、どういったことで悩んでおられるのかがよく分かりました。相談室の扉のように、飾りつけができるかと無機質な感じが減って入りやすくなるかなとも考えました。<1/26 記載分>

3-4 「ランチアワー」の検証

「ランチアワー」の検証について述べたい。今回の「ランチアワー」設置の目的は、友だち同士でも利用でき、入室した際には気軽に話し相手となれ、簡単な相談にも乗れる人材（見守り人）を配置した居場所をつくるためであった。4回の取り組みを通じて、友だち同

士で利用できる部分については、一定の目的を達成できた。しかし、見守り人としてのボランティア（以下、ボランティアと表記。）の配置については課題が残った。筆者の想定した、気軽に話し相手となれる人材が何人もいたことが、学生の見知らぬ人への抵抗感を惹起してしまった可能性もある。ボランティアのコメントの中にも、人的資源について、見守り人の固定化も必要ではないか、年の近いボランティアとしての関わり方をどうするか、といった意見が見られた。特にEさんの「初めて来たようでしたが、リラックスして、楽しんでくれているようなので、何回か来られるようであれば、関係がどう深まっていくか、どんな話が出るかも見守っていこうと考えています。」というコメントにあるように、ボランティアと本学学生との関係性を重視した配置を考える必要があるだろう。そして、ボランティアから出た場の設定についての意見、パーティションの有無を考える必要があるのではないかと、必要に応じて適度な音量のBGMを流してもいいのではないかと、についても、今回とは違う形の設定を試みる必要があるだろう。また実施時期については、学校行事や学生の動きを把握して決めることも必要となる。さらに、今回は参加したボランティアのコメントは集約することができたが、利用した学生の声を集約することができなかった。利用した学生の声を受けた形での今後の展開を考えることや、学生のニーズを把握することも必要であった。これらについては、次回以降の検討課題としたい。

4. まとめ

本稿では、学生相談の個別カウンセリング以外の取り組みの一つでもあり、本学における学生の居場所づくり事業の一環としての「ランチアワー」の実践について報告した。2017年独立行政法人日本学生支援機構の「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成27年度）」²¹⁾によると、「学生相談に対応する組織における個別相談以外の活動状況」で、＜居場所による援助活動＞を挙げているのが、大学で37.8%、短期大学で29.8%、高等専門学校で38.2%であった。大学では4割近い実施率となっているが、短期大学では3割を切っており、個別相談以外の活動の選択項目（学生生活等に関する授業、心理教育的ワークショップ、各種グループ活動、居場所による援助活動、など）について無回答であった大学は14.9%、短期大学は26.7%、高等専門学校が1.8%ということも加えると、短期大学における個別相談以外の活動が大学と比べるとあまり実施されていない、という点も浮かび上がっている。こうした現状は、短期大学の2年間という修学年限や、基本的に資格を取得する学科・コースが多く、学生が週5日間空き時間のない時間割となる学生生活を送っているということからも想像できる。

今回の「ランチアワー」の実践に際しては、他大学での実践を参考に昼休みに学内の空きスペースを活用する形で、月2回計4回の開室を行った。実践に先立って、最も考慮したのが人材の確保であった。他大学での実践では、学生相談室のカウンセラーや学生相談に携わる教員（教員相談員）が、「ランチアワー」に関わる形式が多い（表1）。それは学生相談室を毎日開室している大学ならではのことで、本学のような小規模短期大学とは事情が異なる。本学は週2回1日6時間勤務で、学生相談室のカウンセラーが配置されているが、現状では昼休みのカウンセリングの枠が埋まっており、カウンセラーに「ランチアワー」の取り組みに協力してもらうことは難しかった。そのため、筆者の院生時代の経験に基づき、ボランティアの活用を構想した。前節で述べた本学学生の見知らぬ人への抵抗感を考慮しながらも、対人援助職を目指す学生がほとんどである本学の性質からも、「ランチアワー」や前稿で報告した「ほっとスペース」の展開に、今ある人的資源だけではなく多様な人材を登用することは必要であり、学生のコミュニケーション能力の向上にも寄与することと考える。今後、どのような人材を活用するかも課題である。これについては、大垣女子短期大学のピアサポート活動²²⁾のような、気軽に相談できる学内の先輩が、授業や実習、アルバイトのことや日常生活のこと等に対して、学生目線に立ったアドバイスを行うという取り組みを見せているところもある。このピアサポート活動の担い手は、“ピアヘルパー”^{注2)}の資格を

持った学生である。ピアつまり仲間同士での相談体制を構築するというあり方も、今後検討してみたい。

謝辞

本稿で報告した「ランチアワー」及び「ほっとスペース」の実施にあたって、以下の方々の支援をいただいた。

ボランティアとして活動して下さった 7 名の院生さん、ボランティアの派遣に協力して下さった A 大学大学院教授 I 氏、「ランチアワー」の見守り人となって下さった元本学教員 M 氏、本学学生相談室のカウンセラーさん 2 名、本学学生支援センター〈学生生活〉、学生支援センター〈教務〉の職員の皆様、ここに記して感謝を申し上げます。

また、本研究については、平成 29 年度学長裁量経費^{注3)}の適用を受けた。採択となったことについてもここに感謝いたします。

注釈

注 1) 笠原は「医師やカウンセラーは青年からみて成人像を担う存在である。」とし、「彼ら青年に近づきうる唯一の方法は、私の思うには叔父一甥（ないしは叔母一姪）的關係をつくることしかない。(中略) 父一息子という直系的關係に対して、「斜めの關係」といってよい。」²³⁾と述べ、治療者一被治療者、父一息子、母一娘、教師一学生、といった直系の關係ではない中立的關係の存在としての「斜めの關係」の重要性を指摘している。

注 2) ピアヘルパーとは、学生を対象とした日本教育カウンセラー協会認定資格で、同協会のホームページによれば、「青年や学生なら誰でも遭遇する問題の相談相手になる、あるいはピアグループ（たとえばボランティアも含む各種サークルなど）の世話役をつとめるのがピアヘルパーの活動許容範囲です。」²⁴⁾となっている。本学においても資格認定試験を実施している。

注 3) 学長裁量経費とは、平成 29 年 7 月 20 日付けで、本学学長名で募集があったもので、「学長の判断により、学内の教育改革に取り組む教員又は組織（学科、コース、各部署等）を財政的に支援するための制度」である。筆者は元本学教員 M 氏と共に、「学生の居場所作り事業」として、和室に「ほっとスペース」を開設するために必要な経費を申請し採択された。

引用・参考文献

- 1) 別所崇：「学生相談における居場所づくり：対人関係支援を目的とした取り組み」、『奈良佐保短期大学紀要』、特別号、pp.77-86（2018）
- 2) 岩橋知子：「個別相談以外の学生相談活動の最近の動向」、『福岡教育大学紀要 第四分冊、教職科編』、55、pp.119-132（2006）
- 3) 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会編：『学生相談ハンドブック』、学苑社（2010）
- 4) 独立行政法人日本学生支援機構：「大学等における学生生活支援の実態調査（平成 18 年 6 月 30 日発表）」学生相談について [参考資料]、https://www.jasso.go.jp/about/statistics/_icsFiles/afieldfile/2015/11/06/4_soudan_san.pdf（2018.10.27）
- 5) 神戸女学院大学：「神戸女学院大学カウンセリングルーム（学生相談室）」、<https://www.kobe-c.ac.jp/gakuso/program/tea.html>（2018.10.27）
- 6) 帝塚山大学：「学生相談室（カウンセリング・ルーム）」、<http://www.tezukayama-ac.jp/campuslife/institution/counseling.html>（2018.10.27）
- 7) 関西福祉科学大学：「学生相談室」、<https://www.fuksi-kagk-u.ac.jp/campuslife/counseling.html>（2018.10.27）
- 8) 明治大学：「学生相談室」、<https://www.meiji.ac.jp/soudan/index.html>（2018.10.27）
- 9) 京都外国語大学：「学生相談室だより」、<http://www.kufs.ac.jp/blog/department/counseling-room/detail/702>（2018.10.27）
- 10) 麗澤大学：「学生相談センター／健康支援センター」、<https://www.reitaku-u.ac.jp/campus>

- life/support/center.php (2018.10.27)
- 11) 広島修道大学:「学生生活上の支援 相談窓口 学生相談室のサービス」, <http://www.shudo-u.ac.jp/lifesupport/9q8799000000ni4.html> (2018.10.27)
 - 12) 目白大学:「学生相談室」, <https://www.mejiro.ac.jp/college/campuslife/support/counselling/> (2018.10.27)
 - 13) 中村家子:「事例紹介 「ティーアワー」について:居場所と仲間を育むグループ活動 (特集・学生相談:こころの成長支援)」, 『大学と学生』, 28, pp.40-41 (2006)
 - 14) 13) と同書, p.45
 - 15) 中村家子:「事例紹介 学生相談室におけるグループカウンセリング『ティーアワー』の試み (特集・学生相談)」, 『大学と学生』, 433, pp.39-40 (2001)
 - 16) 15) と同書, p.40
 - 17) 枝廣和憲:「「斜め(ナナメ)の関係」が高校生の自我発達に与える影響:ピア・サポートプログラム開発のための基礎的研究」, 『ピア・サポート研究』, 8, 日本ピア・サポート研究会, p.11 (2011)
 - 18) 文部科学省 (2007年2月):「「いじめを早期に発見し、適切に対応できる体制づくり」一ぬくもりのある学校・地域社会を目指して一子どもを守り育てる体制づくりのための有識者会議まとめ (第1次)」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/040/toushin/07030123.htm (2018.11.30)
 - 19) 首相官邸:教育再生実行会議専門調査会(第2回)配布資料(2016年11月24日), <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/chousakai/dai2/siryou.html> (2018.11.30)
 - 20) 今村久美:「ナナメの人間関係と本音の対話が思春期世代の心に火を灯す」, <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/chousakai/dai2/siryou2.pdf> (2018.11.30)
 - 21) 独立行政法人日本学生支援機構:「大学等における学生支援の取組状況に関する調査(平成27年度)」, https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afieldfile/2017/02/14/h27torikumi_chosa_part3.pdf (2018.10.27)
 - 22) 大垣女子短期大学:「学生相談室」, <https://www.ogaki-tandai.ac.jp/life/life-consultation/> (2018.11.22)
 - 23) 笠原嘉:『青年期:精神病理学から(中公新書463)』, 中央公論社, pp.115-124 (1977)
 - 24) NPO 日本教育カウンセラー協会:「ピアヘルパーの認定」, <http://www.jeca.gr.jp/peer/peer.htm> (2018.11.30)